

2018年度北海道大谷学園連合会
高等学校相互評価報告書

対象校 北海道大谷室蘭高等学校

評価校 札幌大谷高等学校



HOKKAIDOOTANI
MURORAN HIGH SCHOOL

(実施日：2018年12月14日)

2019年3月31日

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

主査	中西 猛雄（北海道教区大谷学園委員会委員）
委員	堀 武（北海道教区大谷学園委員会委員、元北海道学事課長）
委員	金石 潤導（真宗大谷派北海道教区教化本部長）
委員	種市 政己（札幌大谷高等学校長）
委員	大西 正宏（帯广大谷高等学校長）
委員	山下 優（稚内大谷高等学校長）
委員	富原加奈子（札幌大谷高等学校教頭）
委員	高野 敏彦（札幌大谷高等学校事務長）

北海道大谷室蘭高等学校の概要

・設置者	学校法人 望洋大谷学園
・理事長名	西崎 習一
・校長名	竹本 将人
・開設年月日	1958年1月
・所在地	北海道室蘭市八丁平3丁目1番1号
・設置学科	普通科
・入学定員	総定員 225名
・教職員数	33名 総人数(講師・警備を含む) 43名

調査結果

今回の訪問調査では新しい校舎の建築について、また地震時や被害状況などを中心にお話を伺いました。

〔校舎について〕

校舎のデザインは、たいへんモダンで優れたデザインである。高等学校施設としてはなかなか見たことがないものであった。

校舎内部の各エリアはゆったりとした開放的な空間で、HR 教室以外にフリースペースがふんだんにあり、特別活動や行事に向けた取り組みなど様々な生徒活動がのびのびと展開でき、生徒の日常生活を充実したものにしていると思う。

内部空間のカラーリングは、モダンで大胆な色使いであり、教育施設というよりは、現代的な公共施設の印象を与えている。また、余計な装飾を省き天井の処理とも合わせて合理的でシンプルな印象を与えている。HR 教室の廊下側窓が広く、授業者と生徒のやりとりの様子がよく見え、生き生きとした表情や雰囲気が見ることができ、学校全体として一体感を感じた。

訪問した日は寒い日であったが、校内はコンクリート建築とは思えない暖かさで快適であった。全体を通し、機能的かつ美的な建築とゆったりとした空間は、清掃も行き届いている様子から生徒たちの充実した生活を感じ取ることができた。

〔地震後の状況について〕

体育館のステージ側の半分が、倒壊の危険があるとの診断で立ち入り不可となっていた。ステージ上部のコンクリートの大きな梁の重さによるものとのことだったが、ステージ上にコンクリートの欠片が落ちているのを見て、受け入れるしかない困難な状況の中で日常を過ごしていく強さを感じた。体育授業は冬期、特に体育館を利用するため時間割作成では大変苦慮されていると思う。また、部活動が盛んで実績を上げている中、部活動使用割り当ての限界があり、放課後や休日の活動場所が確保しづらいとのことであるが、公共施設の利用となると利用料金がかかったり、移動に時間などかかったり、経済的な負担が大きくなっている。学校予算はどこも余裕はないので、生徒活動の維持と現実的な問題との間で日々苦慮させていると感じた。

本校も地震の被害はいろいろあったが、使用不可の判定が出たところはなく、本校の被害は軽度なものであったと感じた。本校は、体育授業は手狭で複数クラスの合同授業で展開し、部活動も多く日常でも体育館使用は窮屈な状況である。本校の体育館も校舎も劣化が進んでいる。もしもの場合、様々な要素の問題が起こってくるだろう。先決事項・優先順位を明確にした対処を心掛けなければならないと感じた。

本校では地震直後に考えていた準備や整備すべき点は、余震がほぼ感じられなくなった今、気が付けば後回しになっている現状があると感じた。経済的に余裕がなく進められないことも多いが、生徒の安全のため教職員一同、常に備えを忘れずにいなければならないと感じた。

以上、今回の調査訪問で多くのことを学ぶことができました。これからの校務運営の参考にさせていただきます。ご対応いただきました竹本校長先生、南條教頭先生、庭田事務長には、多くのご助言をいただき誠にありがとうございました。感謝申し上げます。